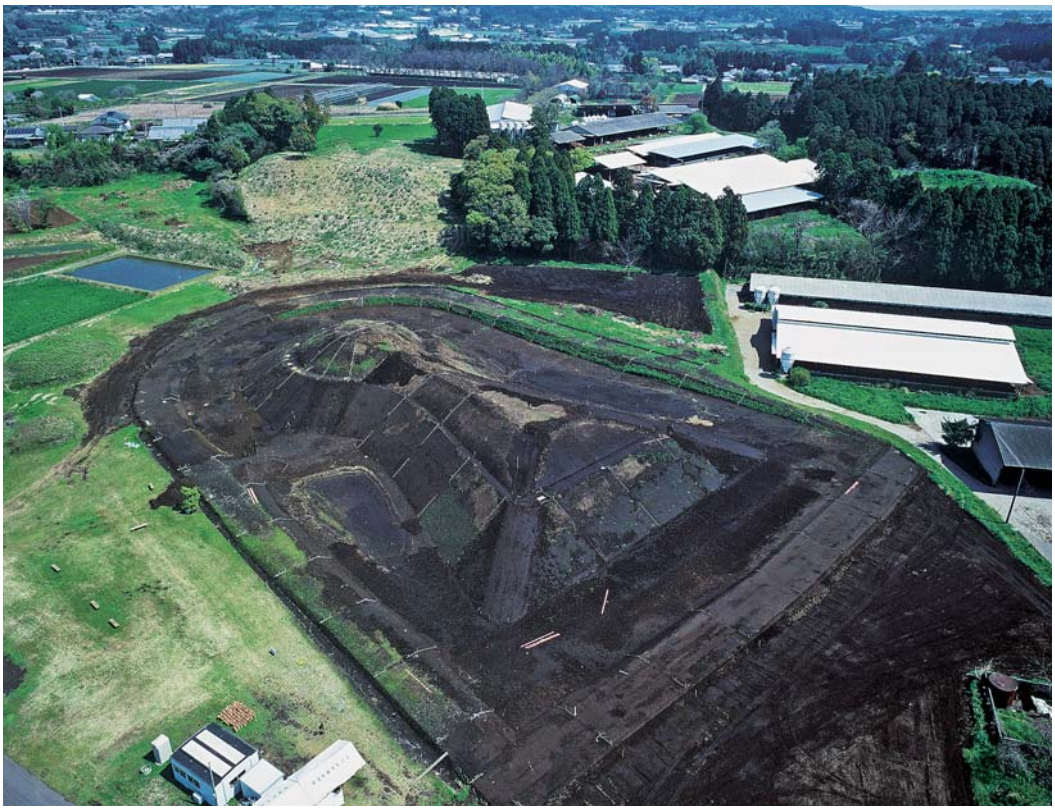
新富町文化財調査報告書　第 57 集

祇園原古墳群 13

（ぎおんばるこふんぐん）

国指定史跡「新田原（にゅうたばる）古墳群」史跡整備にともなう発掘調査概要報告書（13）



百足塚古墳（平成20年度末の様子）

２０１０

宮崎県　新富町教育委員会

序

宮崎県の一ツ瀬川流域は数多くの古墳群があることで知られています。このうち本町にある国指定史跡新田原古墳群は、古墳時代後期を中心とした日向地方最大の首長墓群を中心としています。

新富町ではこの重要な史跡を広く活用するため、平成９年に策定した基本計画をもとに調査を行っています。

本年度は百足塚古墳周辺の復元整備を行うため、62号墳・63号墳に加え、新しく発見された209号墳の確認調査を行い、復元整備実施設計の策定を行いました。

209号墳は、既に墳丘が失われた円墳でしたが、周溝の中から須恵器60点以上が検出され、同所での埋葬儀礼の一端を知ることができました。

今後もこれら調査データを元に、整備計画を進める所存です。最後になりましたが、調査と計画立案の際にお世話になった関係者の方々には深く御礼申し上げます。

新富町教育長　　米　良　郁　子

例　言

１．本書は平成21年度に行った宮崎県児湯郡新富町に所在する国指定史跡新田原古墳群の史跡整備に向けた確認調査の概要報告書である。

２．この事業は史新田原古墳群登録記念物保存修理一般事業として文化庁の国庫補助金と宮崎県費補助金を受け、宮崎県文化財課及び新田原古墳群史跡整備専門検討委員会の指導のもと行った。

３．国指定史跡新田原古墳群は新富町内の大字新田に分布する古墳の指定名称であるが、古墳の分布は大きく４つに大別できるため、それぞれ塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群と呼んでいる。今回の短期整備計画は祇園原古墳群を対象としている。史跡整備の短期整備計画は祇園原古墳群を対象としている。

４．本書の執筆・編集は有馬と樋渡が行った。

５．本書で使用した位置図は国土地理院発行の２万５千分の１図を基に作成し、調査範囲図はそれぞれ現場にて平板測量した。

６．本書で使用する方位は古墳群分布図以外はすべて磁北である。

７．出土遺物とその他の記録類はすべて新富町教育委員会生涯学習課で保管している。

本文目次

Ⅰ．古墳群の位置と概要……１ページ
Ⅱ．既往の調査……５ページ
Ⅲ．平成21年度の事業……９ページ
Ⅳ．まとめ……18ページ

図版目次

図１　一ツ瀬川流域の古墳群分布……２ページ
図２　祇園原古墳群の古墳分布……３ページ
図３　百足塚古墳の復元模式図……６ページ
図４　百足塚古墳周辺整備設計図(1)……11ページ
図５　209号墳出土須恵器……14ページ
図５　百足塚古墳周辺整備設計図(2)……17ページ

写真図版目次

写真１　祇園原古墳群の古墳分布……４ページ
写真２　調査中の百足塚古墳……７ページ
写真３　祇園原古墳群の前方後円墳群…８ページ
写真４　62号墳……12ページ
写真５　63号墳……12ページ
写真６　209号墳調査前……13ページ
写真７　209号墳トレンチ……13ページ
写真８　209号墳須恵器出土状況……13ページ
写真９　209号墳出土須恵器（1）……15ページ
写真10　209号墳出土須恵器（2）……16ページ

Ⅰ．古墳群の位置と概要

１．国指定史跡「新田原古墳群」と祇園原古墳群の概要

⑴　国指定史跡「新田原古墳群」の実態

国指定史跡新田原古墳群は一ツ瀬川左岸台地から沖積地に点在する古墳の総称である。

その実態は、現在の新富町西部（旧新田村）にあった古墳を行政単位で指定措置した結果の名称であり、その分布の状況や推測される古墳の築造時期から、本来は大きく４つの古墳群に大別すべきものである。現在はそれぞれを別の古墳と考え、東から塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群と呼んでいる。

⑵　祇園原古墳群の概要

このうち、祇園原古墳群は一ツ瀬川左岸台地上にあり、154基の高塚墳が現存している。内訳は、前方後円墳14基、方墳１基、円墳138基、墳形不明１基だが、これまでの発掘調査で墳丘が消滅した円墳の周溝が40基確認されているので、古墳総数は194基に及ぶ。

古墳の分布は標高70～90mの台地上で、西側直下には一ツ瀬川が流れ、東は一段高い台地面になっている。また台地には南北に貫入する２本の谷があり、古墳群はこれら谷地形によって区分されたＡ～Ｄの４グループに大別できる。

墓域の形成は弥生時代終末期までさかのぼる。群の北東部高位台地で確認された川床遺跡には円形周溝墓・方形周溝墓を中心とした195基の土壙墓群が発見された。最近の調査によって、これら墓域の周辺の低位台地面には、竪穴住居を中心とした小規模な集落が確認されている。

古墳時代前期になると北西部に前方後円墳が２基登場する。詳細はわからないが、Ａグループの北西部に展開するグループは前期から中期にかけての築造である可能性が高い。

Ａグループは東側傾斜面を南北につらなって築造された12基の前方後円墳が中心である。前期には、台地北西端部に前方部が低平で後円部径に対して狭長な前方後円墳が２基(187号墳・195号墳)築造されている。その後、同形の前方後円墳は継続しないが、５世紀中頃になって大久保塚古墳が造られる。表採される埴輪や墳形は、先述のように西都原古墳群の女狭穂塚古墳や茶臼原古墳群の児屋根塚古墳に類似するため、近接する時期に築造されたものと推測できる。５世紀後半には大久保塚古墳に継続する古墳はみあたらないが、今後の調査で中小規模墳の築造時期がわかれば、古墳群築造の連続性を明らかにできる可能性もある。

６世紀になると前方後円墳の築造は爆発的に増加し、墳長60～100mの大型墳と墳長60m以下の中規模墳が築造され、その多くで埴輪が樹立されている。ほとんど調査されていないので、詳細は今後の検討課題であるが、埴輪の観察から、前者は59号墳→百足塚古墳→68号墳→弥吾郎塚古墳と連続し、後者は水神塚古墳→機織塚古墳→52号墳と連続して築造されたと予想される。これら大規模墳と中規模墳は併行して築造された可能性が高く、古墳群全体としては中小の円墳を含めた階層構成型の群構造であると考えられる[7]。

Ｂ・Ｃグループは前方後円墳をそれぞれ１基づつ含む後期群集墳である。特にＢグループではほ場整備にともなう調査で36基の消滅墳が検出され、周溝に掘られた二次的埋葬施設と考えられる地下式横穴が５基検出され、近接して４基の馬の埋葬土壙もあった。これら群集墳の築造は、出土した須恵器を検討すると、TK10型式併行期に始まり、MT85型式をピークに、隼上りⅡ型式まで継続するようだ[8]。

Ｂグループの霧島塚古墳は詳細不明だが、Ｃグループは前方後円墳の139号墳ののち、140号墳(円墳）・138号墳（方墳）と続く終末期の一首長墓系譜であり、石船古墳群のように６世紀後半に登場したものだろう。祇園原古墳群はこれらの首長墓群を中心に、小円墳が数多く築造され、その結果、大きな古墳群となったのだろう。また群集墳の築造が終息し、２次的埋葬が行われるなか、Ａ群の北部高位台地斜面に横穴墓群が築造されている。

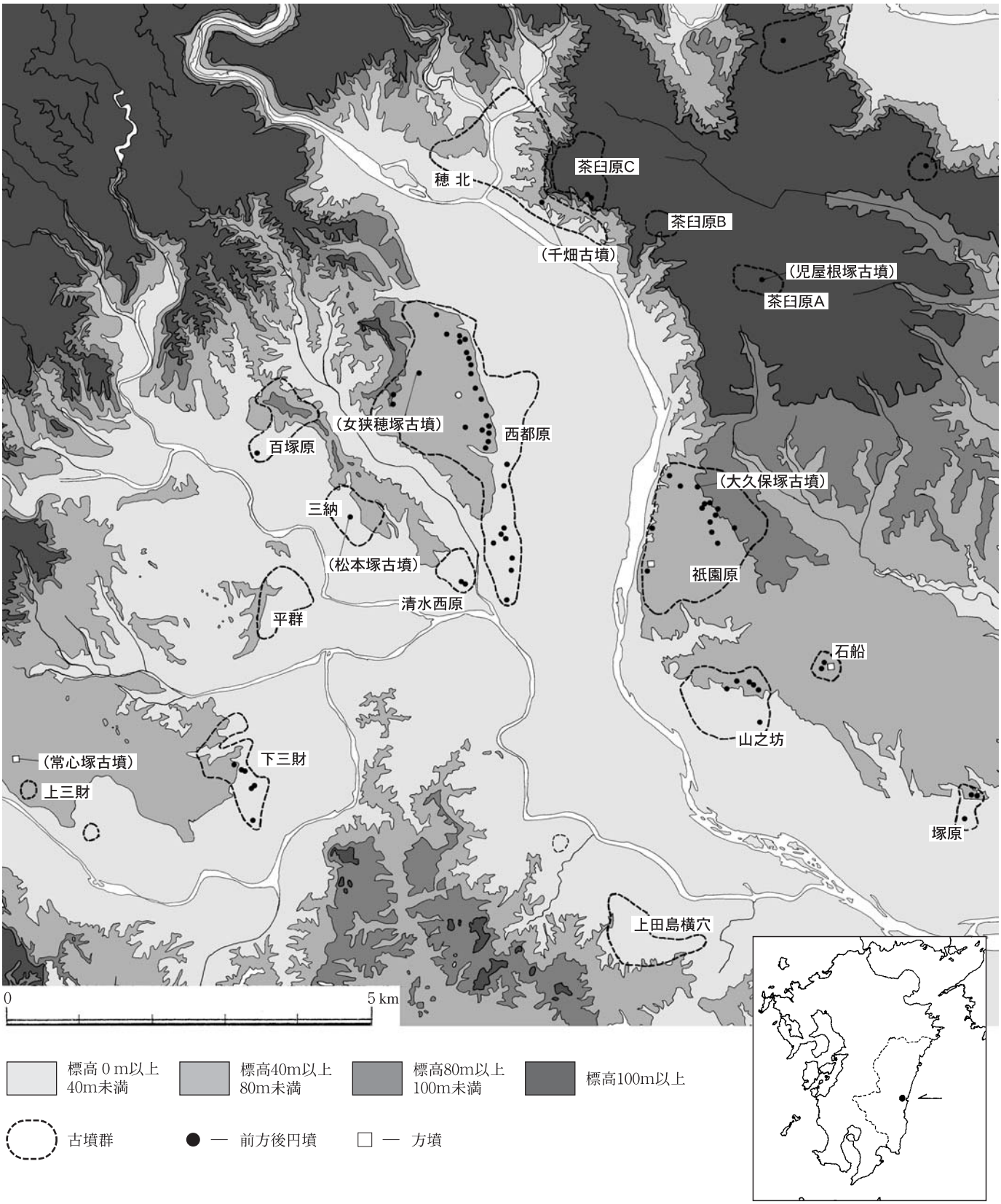


図１　一ツ瀬川流域の古墳群分布

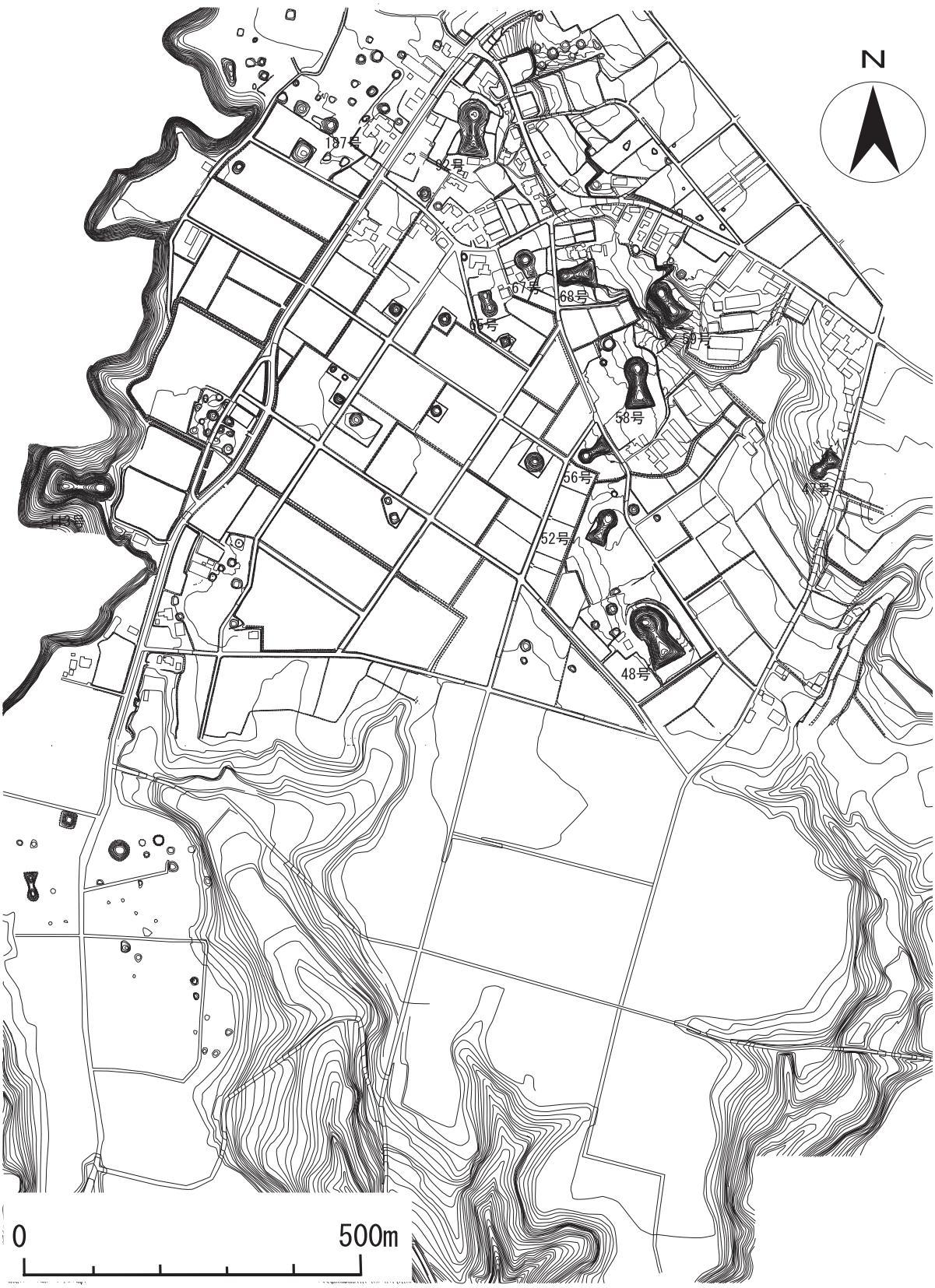


図２　祇園原古墳群の古墳分布

２．整備までの経緯

新田原古墳群は昭和19年に指定措置を受けてから昭和40～50年代にかけて公有化がなされてきた。それら指定地は町が管理している。しかし公有化された墳丘は保護の対象でありながらも、その周辺に存在する埋没した周溝や、古墳を取り巻く築造当時の地形など重要な考古学的情報は十分把握されていない。

このような状況のもと、指定措置から半世紀以上が経過し、建造物が古墳どうしの視界を遮り、農地のほ場整備によって旧地形が変化するなど、古墳を取り巻く周辺環境が大きく変化してきた。また平成４年度に祇園原古墳群が分布する祇園原地区でほ場整備が計画されたのをきっかけとして、平成７年度から追加指定措置と指定地買収を行い、平成８年度には積極的な史跡の活用を目的に「新田原古墳群史跡整備基本計画」を策定した。

基本計画の骨子は「古墳の保存整備と同時に畑地のなかに点在する古墳の風景をさらに良好なものとし、歴史と自然が融合した景観整備を行う」ことであり、対象面積が広大であるため、短期・中期・長期からなる30年以上の計画とした。

３．短期整備計画

短期整備の範囲は、「新田原古墳群」のなかでも公有化率が高く、前方後円墳が多く分布する祇園原古墳群Aグループを対象とした。Aグループは墳丘や周溝を含めた古墳間が連続して町有地であるため、見学者の利便性にあった整備がしやすい。短期整備では、①主要な前方後円墳の

写真１　祇園原古墳群の古墳分布

復元、②ガイダンス施設の設置、③見学園路の整備を目的とした。　整備期間は平成９年度から20年度までの13年間で、10年間にわたる発掘調査で百足塚古墳と59号墳の基礎データを整理し、墳丘復元やガイダンスでの展示を予定していた。

平成17年度には基本計画をより具体的に整理し、短期整備計画区域の整備方針として、Ａ群を３つの段階に区分し、百足塚古墳・59号墳・68号墳の３基を含む第１期整備優先区域を５ヶ年間で整備する実施計画を立案した。

平成18年度には、百足塚古墳の復元のための実施設計を行った。設計に際しては、各調査区のデータをもとに、遺存している墳丘面と築造当初の墳丘の予測を行い、遺構を保存すべき被覆土と掘削すべき埋土量の計算を行っている。

Ⅱ．既往の調査

１．整備事業までの調査

はじめて祇園原古墳群の記録が登場するのは、明治32年のことである。宮崎県を訪れた坪井正五郎は古墳群を巡見して、円筒埴輪列が残る古墳が存在することや、横穴式石室を採用した前方後円墳があることなどを略述している。この巡見の際に表採された形象埴輪は八木奘八郎によって紹介されたこともあった。

その後、大正４年には京都大学助手梅原末治（のちの同大学教授）が西都原古墳群の調査に関連して児湯郡一帯の古墳群を巡見し、その結果を「日向西都原周辺の古墳」で紹介している。主要古墳の名称が紹介されたのはこの時は初めてである。

昭和19年に国指定史跡となってからは調査の手が入ることがなく、本格的な調査が始まったのは最近になってからである。平成元年には新田原古墳群管理策定事業の一環として、古墳群の航空測量が行われ、その概要は平成５年に報告されている。

平成３年度には、祇園原古墳群でほ場整備を目的とした発掘調査が開始され、昭和のはじめ頃に消滅した円墳36基の周溝が確認できるにいたった。周溝には２次的な埋葬主体部と考えられる地下式横穴が５基発見されている。また周溝に隣接する状態で発見された馬の埋葬土壙が５基発見されている。

平成５年度からは祇園原古墳群で宮崎大学考古学研究室との合同による墳丘測量調査がおこなわれ、祇園原古墳群の前方後円墳のほとんどが測量図作成されるにいたった。

２．整備事業における確認調査

史跡整備事業における確認調査は、これまで百足塚古墳（新田原58号墳）と新田原59号墳の調査をおこなってきた。

⑴　百足塚古墳の調査

百足塚古墳は墳長76.4m、後円部径32m、前方部幅43.6m、クビレ部幅38mを測り、前方部をほぼ正南にむけ、周囲に盾形周溝を有する２段築成の前方後円墳であることが判明した。墳丘は東から西への傾斜面に立地し、盾形周溝は東側では確認できるが、西側では等高線の実測でようやく痕跡を認め得るような状態であった。また北西部の周溝に近接して円墳（62号墳・63号墳）が２基あり、百足塚古墳に従属的な陪塚の可能性が高い。

百足塚古墳では平成５～６年度には指定地の追加を行う確認調査として、62号墳・63号墳を含んだ範囲にトレンチを４本設定した。その結果、それぞれの古墳で周溝が確認でき、62号墳と百足塚古墳には大量の埴輪が樹立されていたことがわかった。検出できたのはほとんどが円筒埴輪で、川西編年のⅤ期に該当するため、両古墳は６世紀に築造されたことが判明した。

平成９年度からは、史跡整備を目的とした調査を開始し、百足塚古墳に近接する62号墳の周溝

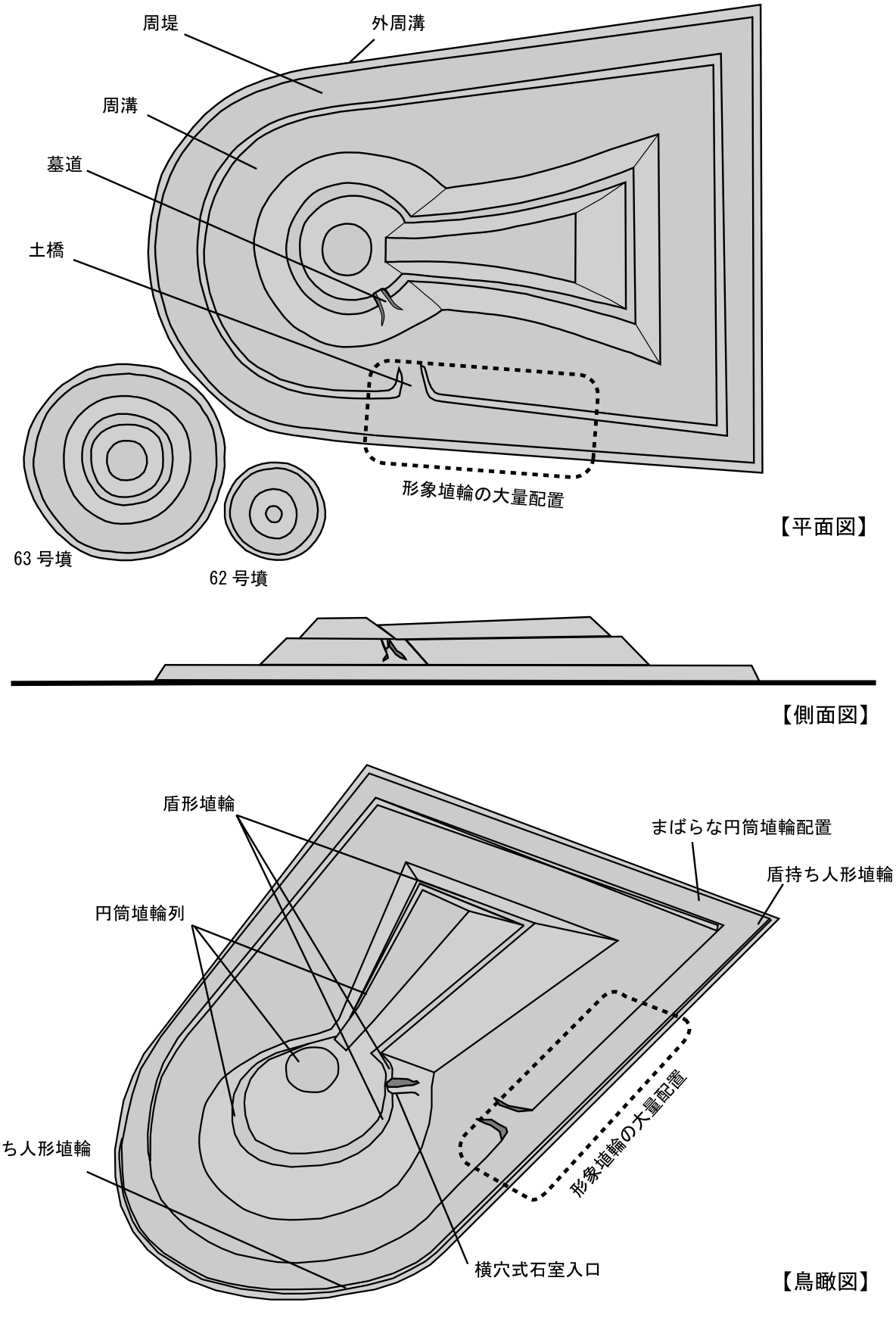


図３　百足塚古墳の復元模式図

の位置を把握する調査区（Ⅰ区)、百足塚古墳後円部西側周溝を確認する調査区（２区）を調査し、それぞれ周溝と転落した埴輪片、弥生時代中期の住居址３基を検出した。また前方部西側に設定したトレンチからは多くの形象埴輪片が出土した。

平成10年度から12年度には形象埴輪の配置や内容を確認するため、前方部西側周溝から後円部西側周溝に調査区（２区・３区）を設定した。調査の結果、周溝と同様に完周する「周堤」の存在とそこに樹立されていたであろう大量の形象埴輪が確認できた。周堤の外側には現在では部分的にしか確認できない外周溝（幅約50㎝）があり、このことから周堤の幅は約６ｍであることがわかった。また周堤から西側クビレ部にむかう幅２ｍの土橋の存在も確認できた。形象埴輪の出土箇所はこの土橋から南側の周溝と外周溝内にいたる約40ｍにも及び、形象埴輪による祭祀行為はこの土橋から周堤上にあったと予想される。形象埴輪片の出土点数はプラスチックコンテナケースで約400箱にも及び、その数と種類は西日本でも類例の少ないものである。

平成13年度からは墳丘と東側周溝の確認調査を開始した。周溝は各所で立ち上がりが確認でき、おおよそ盾形周溝が確認できることが判明した。また後円部に設定したⅣ区で埋葬主体と考えられる横穴式石室の閉塞部が確認できた。調査は閉塞部の取扱いを残し、すべてのトレンチは調査終了している。

⑵　新田原59号墳

平成17年度からは新田原59号墳の確認調査を開始し、墳丘主軸と後円部・クビレ部のトレンチを設定し、墳丘の遺存状況の確認を行った。１トレンチでは、家と鶏の形象埴輪片が外堤から転落した状態で検出でき、４トレンチでは外堤の外側から須恵器が集中して破砕した状態で見つかった。墳丘は２段築成であり、１トレンチでは墳頂とテラスで円筒埴輪列が遺存していることが判明した。５トレンチの前方部ではテラスに円筒埴輪が６本並んでいる状態が良好に検出できた。

平成18年度の調査では後円部西側に設定した８トレンチ、クビレ部附近に設定した９トレンチ、前方部の東西に設定した６、７トレンチを調査し、６トレンチではテラスに円筒埴輪列の遺物を検出できた。

写真２　調査中の百足塚古墳

写真３　祇園原古墳群の前方後円墳群

Ⅲ．平成21年度の調査

１．事業概要

第１期整備優先エリアのうち百足塚古墳本体の整備はほぼ終了したため、次の段階として円墳を含む周辺地形の整備を行うため、周辺整備実施設計を策定することとした。

百足塚古墳周辺には２つの円墳があり、これまでの確認調査で墳丘の消滅した円墳が１基確認されていたため、これまでの調査では不足するデータを得るため、復元のための確認調査を行った。

これら調査データをもとに、３つの円墳の復元と周辺地形復元及び周辺建造物との緩衝帯としての植栽、そして見学者への便益用サイン類を実施設計の対象とした。

⑴　確認調査の概要

62号墳・63号墳に加え、確認調査で存在が判明した209号墳の復元のための確認調査を行った。

62号墳は以前の調査で規模のおおよそが判明していたが、周溝から墳丘にいたる土橋の存在が予想されていたことから、８本のトレンチを設定し、形状復元できるデータを確認した。

63号墳は２段築成の円墳で、おおよその規模が予想されていたが、以前の確認調査から平面形が正円ではなく楕円形を呈することが予想された。また北東側の一部で２重目の周溝が存在する可能性もあったため、62号墳同様に８トレンチを設定し確認を努めた。

209号墳は墳丘が失われた円墳で、周溝の一部が確認されていたが、全様が判然としないため、８本のトレンチを設定したが、周溝の検出状況が判然としないため、全面を検出することとし、周溝のすべてを調査することとなった。

なお、調査時期と実施設計の委託期間の都合から、実施設計図には62・63号墳の調査区を反映させることはできていないため、調査データを整理して実施設計図に反映させる予定である。

表２　平成21年度の事業概要

事業内容／月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
実施計画策定												
62・63号墳発掘調査												
209号墳（無号）確認調査												
出土遺物整理												

⑵　百足塚古墳周辺実施設計

百足塚古墳の周辺整備を行うために円墳の調査データや周辺地形の現在いたるまでの形状変化を検討し、周辺の建造物の遮蔽や植栽計画を検討した。

実施設計の方針は、新田原古墳群史跡整備専門検討委員会で決定し、株式会社中桐造園設計研究所に設計委託を行った。

新田原古墳群の整備においては、子どもたちとの円筒埴輪製作樹立を中心とした手作り感のある整備をめざしており、墳丘の復元方法や、各種サイン類を木製で取替えが容易なものにするなど、工夫を施すこととなった。

⑶　百足塚古墳及び209号墳における出土遺物の整理作業

百足塚古墳の出土埴輪の整理作業は、その破片点数が多く、ようやく個体識別が最終段階に至るところである。本年度は特に後円部の3/4に及ぶ調査区（４区）の整理に入った。

209号墳からは須恵器60点以上が検出できた。須恵器の検出点数としては、祇園原古墳群で最多の数量であり、その一部を後述のように掲載している。

出土須恵器はおおよそTK43形式並行期以降の個体が多いため。209号墳（仮称）は現在想定している百足塚古墳の築造期よりも後に造られたと考えられる。

⑶　地域と共同した復元整備

平成18年度から実施している「上新田っ子を育てる会」との共催事業として、子供達との埴輪づくりを継続している。

同事業では実物の８割の大きさを基本とした円筒埴輪を製作し、復元した百足塚古墳のテラスや外堤に並べ、歴史ある古墳群をより身近かなものに感じようという試みをすすめている。焼成作業は地元新富町の陶芸教室に協力を仰ぎ、灯油窯で焼成作業を行った。この試みは次年度以降も推進していく予定である。

２．事業体制

本事業は新富町教育委員会が主体であり、県文化財課及び新田原古墳群史跡整備専門整備検討委員会の指導のもと行った。平成21年度の事業体制は下記のとおりである。

【平成21年度の発掘調査体制】

○ 総　　括	米良　郁子	(新富町教育委員会教育長)
	後藤　博己	(同　生涯学習課長)
	金丸　雅弘	(同　生涯学習課長補佐兼社会体育係長)
○ 庶　　務	有馬　義人	(同　生涯学習課文化振興係長　庶務担当)
○ 調　　整	有馬　義人	(同　生涯学習課文化振興係長　文化財担当)
○ 調　　査	樋渡将太郎	(同　生涯学習課主任主事　埋蔵文化財担当)
○ 指　　導	小田富士雄	(新田原古墳群史跡整備専門検討委員：福岡大学教授)
	柳沢　一男	(新田原古墳群史跡整備専門検討委員：宮崎大学教授)
	森本　幸裕	(新田原古墳群史跡整備専門検討委員：京都大学教授)
	東　　憲章	(宮崎県教育庁文化財課埋蔵文化財係主任)
○ 作　業　員	杉尾美千子、坂本貞夫、清美喜子、溝口敦子、高家武男、橋口哲男、玉谷鮎美，上山途枝子、黒木啓子、平尾ミズエ、本部裕美、柳田弘、本部定臣	

３．確認調査

⑴　調査の方針

今年度の調査を含め、事業の性格上、史跡整備のための確認調査であるため、以下のような点に留意して調査を行っている。

墳丘は幅1.5mのトレンチ調査を基本とする。各調査区は墳丘を確認することが最大の目的であるため、墳端、テラス、墳頂平坦面の状態把握を優先して実施した。

円筒埴輪は遺存状態が良好な部分は現地保存を基本とするが、樹立位置で倒れていたり、樹立位置から移動している個体について取り上げて整理復元する。

盛土の状態は墳丘構築の方法を知る重要な知見であるが、整備目的の調査であるため盛土であると認定できた段階で掘り下げを終了する。ただし盛土か埋土か不明瞭で判断ができない箇所は攪乱穴などを利用してサブトレンチを設定し確認を行う。

埋葬施設はその位置を確認するのみとし、開口部が判明した際でも、内部を調査しないこととしている。

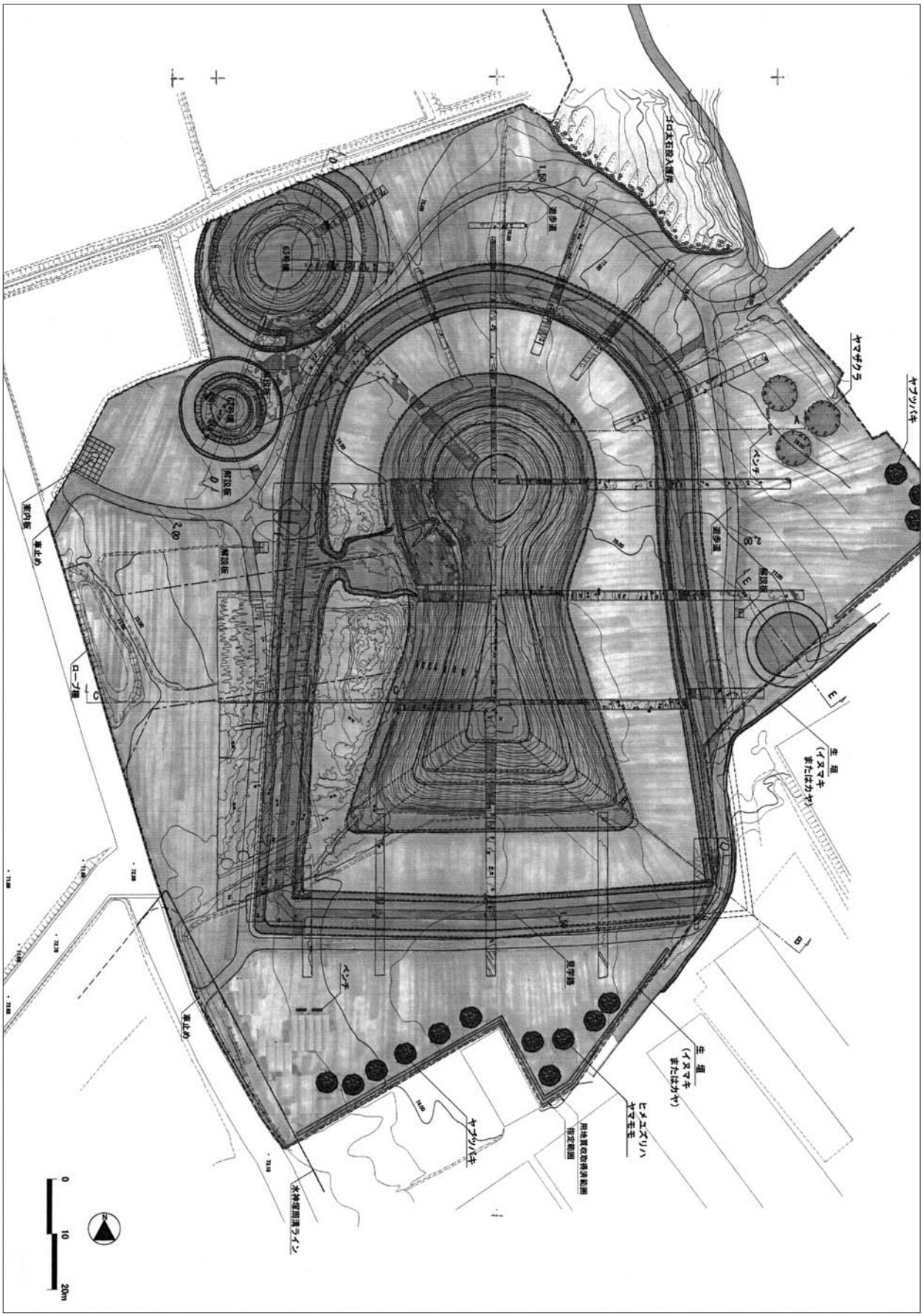


図４　百足塚古墳周辺整備設計図（１）

⑵　62号墳の確認調査

62号墳の概要

百足塚古墳の北西にある円墳である。墳丘周囲は周囲にわたって掘削が及んでおり、現状は直径約７ｍを測る。

これまで３カ年にわたる部分的な確認調査が行われており、周溝の約４分の１が検出され、多量の円筒埴輪が見つかっている。墳丘は部分的な調査しかなされていないが、主体部や墳丘の段築などは確認することができない。

出土した円筒埴輪は百足塚古墳から出土する個体とまったく同様の形態であるが、百足塚古墳よりも全体に焼き歪みなどで形状の悪い個体が多い。

円筒埴輪の形態などから、百足塚古墳と同時期に築造された可能性が高く、いわゆる陪塚的な古墳と考えている。

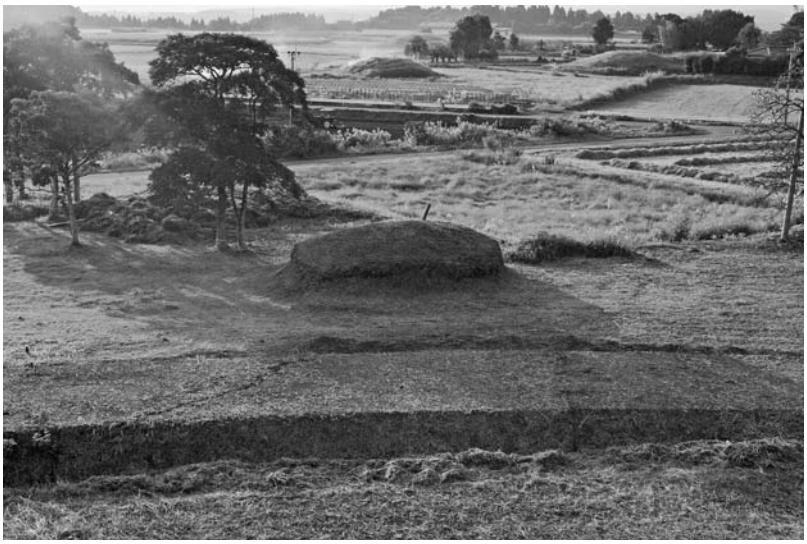


写真４　62号墳

写真５　63号墳

確認調査の内容

以前の調査からおおよその古墳の形状は判明しているが、東側の一部から土橋と想定される箇所が検出されるなど、全体復元を行うための調査区を増やす必要性があった。

したがって墳丘復元のために墳頂の仮の中心点から放射状に８本のトレンチを設定し、各トレンチで周溝の位置、断面の形状の記録を行った。トレンチの幅は1.5mである。

出土遺物

各調査とも円筒埴輪片が出土しており、現在洗浄作業中である。円筒埴輪の形状は、これまでの調査で検出できた。

⑶　63号墳の確認調査

63号墳の概要

62号墳の北側で、百足塚古墳の外堤に接するように築造された円墳である。墳丘の特に南側から東側にかけて大きく掘削が及んでいるが、西側から北側にかけて２段築成の円墳であることを示すテラス面が遺存している。

以前の調査で周溝の４分の１が検出されており、62号墳に比べ約１ｍに及び深い。

主体部などは検出されていない。周溝からは円筒埴輪の破片が少量検出されているが、量が少ないため、同墳に樹立されていたものとは考えられない。

確認調査の内容

これまでの調査では、南東部を中心に周溝を検出してきたが、実際の形状を復元するまでの調査区が設定されていないため、62号墳と同様に墳頂の仮の中心点を設定して、放射状に８本のトレンチを設定した。幅1.5mに及ぶ。

調査は範囲が広いため調査結果をまとめることができなかったが、周溝の深さは予想よりも深く、２段築成の円墳として復元したところ、直径約28mとなった。

出土遺物

円筒埴輪など埴輪片の検出量は少なく、須恵器などが少量検出できた。

⑷　209号墳の確認調査

209号墳（仮称）の概要

平成17年度の調査で円墳の一部が検出されていたが、周辺整備をすすめるにあたって古墳の規模・形状を確認する必要があった。

現状はまったく古墳の存在を認識できない状態である。

確認調査の内容

検出部から予想される仮想の中心点から放射状に８本のトレンチを設定したが、周溝の検出面がアカホヤ層上面のクロボク層であったため、その検出は予想以上に難しかった。そのため、撹乱土を、想定される円墳の範囲にわたって除去し、結果的に周溝を全面的に検出することとなった。

墳丘は全面的に掘削され、すでに存在しない。周溝の幅は不整形であるが、幅２m程度である。撹乱が予想以上に

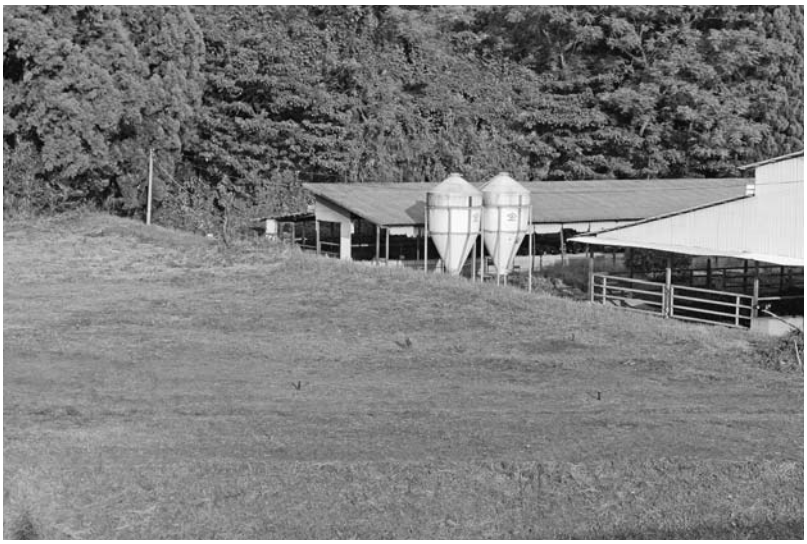


写真６　209号墳調査前

写真７　209号墳トレンチ

写真８　209号墳須恵器出土状況

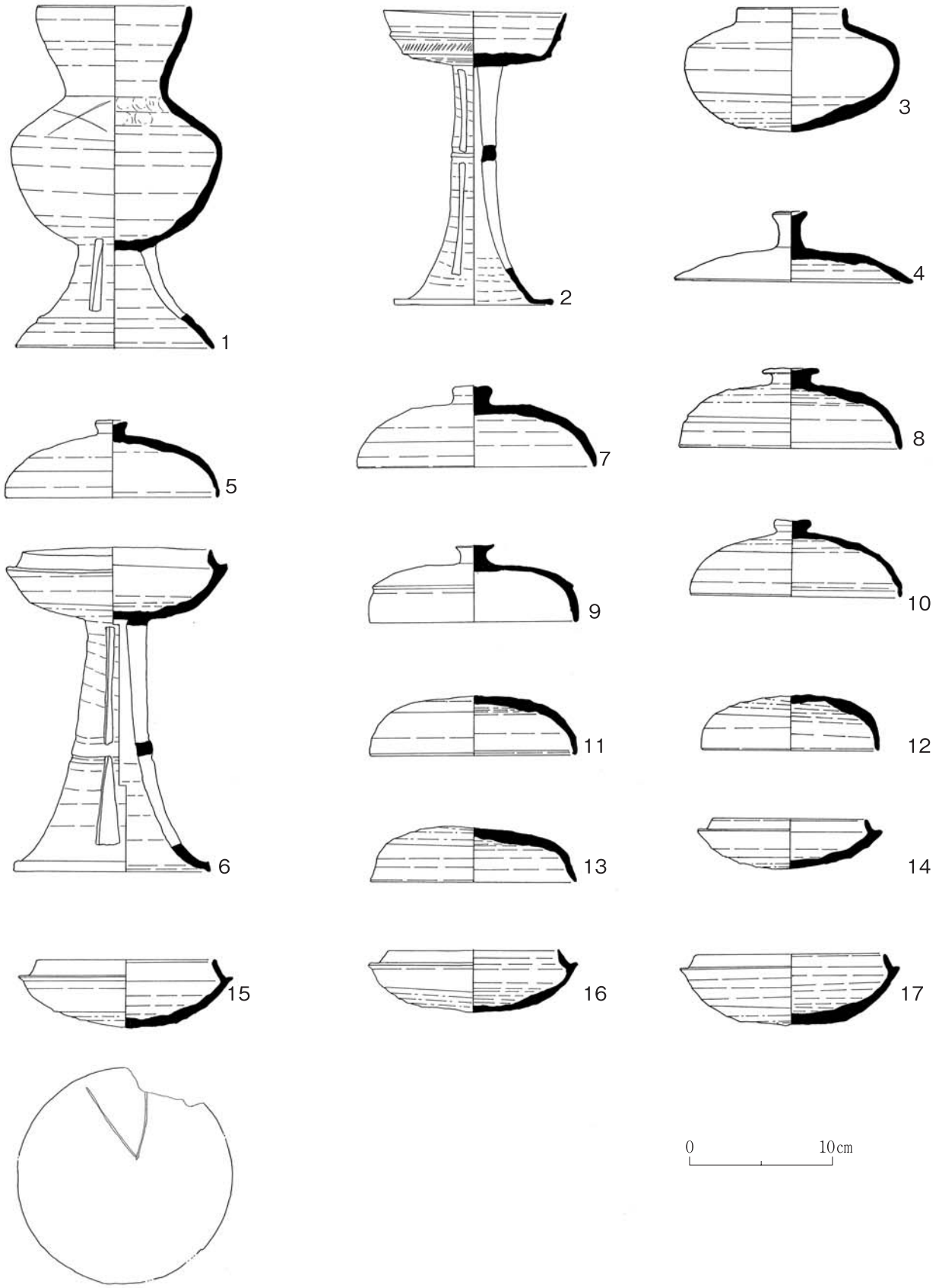


図５　209号墳出土須恵器

進んでいたため、深さ約50㎝程度である。予想される墳丘の直径は約10mである。内部主体や周溝内埋葬はまったく検出できなかった。

円筒埴輪片はほとんど検出されていないが、大量の須恵器片が検出された。復元の結果60点以上の須恵器が復元でき、それらはほとんど墳丘西側に集中していた。

③出土遺物

周溝内からは大量の遺物が出土した。とくに百足塚古墳に面した西側から多く出土しており、設置にさいして百足塚古墳を意識した可能性がある。ほとんどが細かく破砕しておりまた、かなり離れた破片同士の接合があることから人為的に投げ込まれた可能性が高い。須恵器は坏身、坏蓋、有蓋長脚高坏、無蓋長脚高坏、甕、無頸壺、ハソウ、脚台付壺などが出土している。現在整理中だが、総数60個体以上に及ぶ。土師器は模倣坏片などが少量出土しているに過ぎない。埴輪は出土していない。

今回は須恵器17点を図化した。２は無蓋長脚高坏で口径12.6㎝、器高20.3㎝を測る。坏部には斜方向の刺突文が施されている。脚部には２段３方向の透かし孔が施され長方形を呈する。３は無頸壺で口径7.45㎝、器高8.6㎝を測る。口縁はほぼ直立して立ち上がり、底部は丸底である。外面には底部から胴部下半部に回転ヘラケズリを施している。坏身、坏蓋は個体差が激しく、法量にもバラツキがある。今回の掲載分では15～17が須恵邑編年のMT85～TK43型式に相当する。長脚高坏は有蓋、無蓋とも現在整理中のものも含めて、２段透かしで、３方向に施し、長方形ないし台形を呈するのが基本である。脚部は長大化している。以上の特徴から概ね須恵邑編年のMT85～TK43型式に相当する。

４．百足塚古墳周辺整備実施設計

⑴　基本的な整備方針

新田原古墳群の整備は基本計画と実施計画に基づいて行われ、円筒埴輪の手作り製作などを中心に、町民参加型の手作り整備を目指している。今回の整備においても、墳丘復元を直営で行ったり、木製で簡易に製作が可能なサイン類とするなど、手作り感を重視した整備を目指している。

⑵　各円墳の復元方法

整備対象地にある３つの円墳は、百足塚古墳と同様に直営による整備を行うこととした。
62号墳と209号墳は周溝をすべて検出して、のちに

図５－５

図５－６

図５－２

図５－３

写真９　209号墳出土須恵器（１）

図５－４

図５－８

図５－７

図５－９

図５－８

図５－17

図５－13

図５－12

図５－16

図５－14

図５－11

図５－15

写真10　209号墳出土須恵器（２）

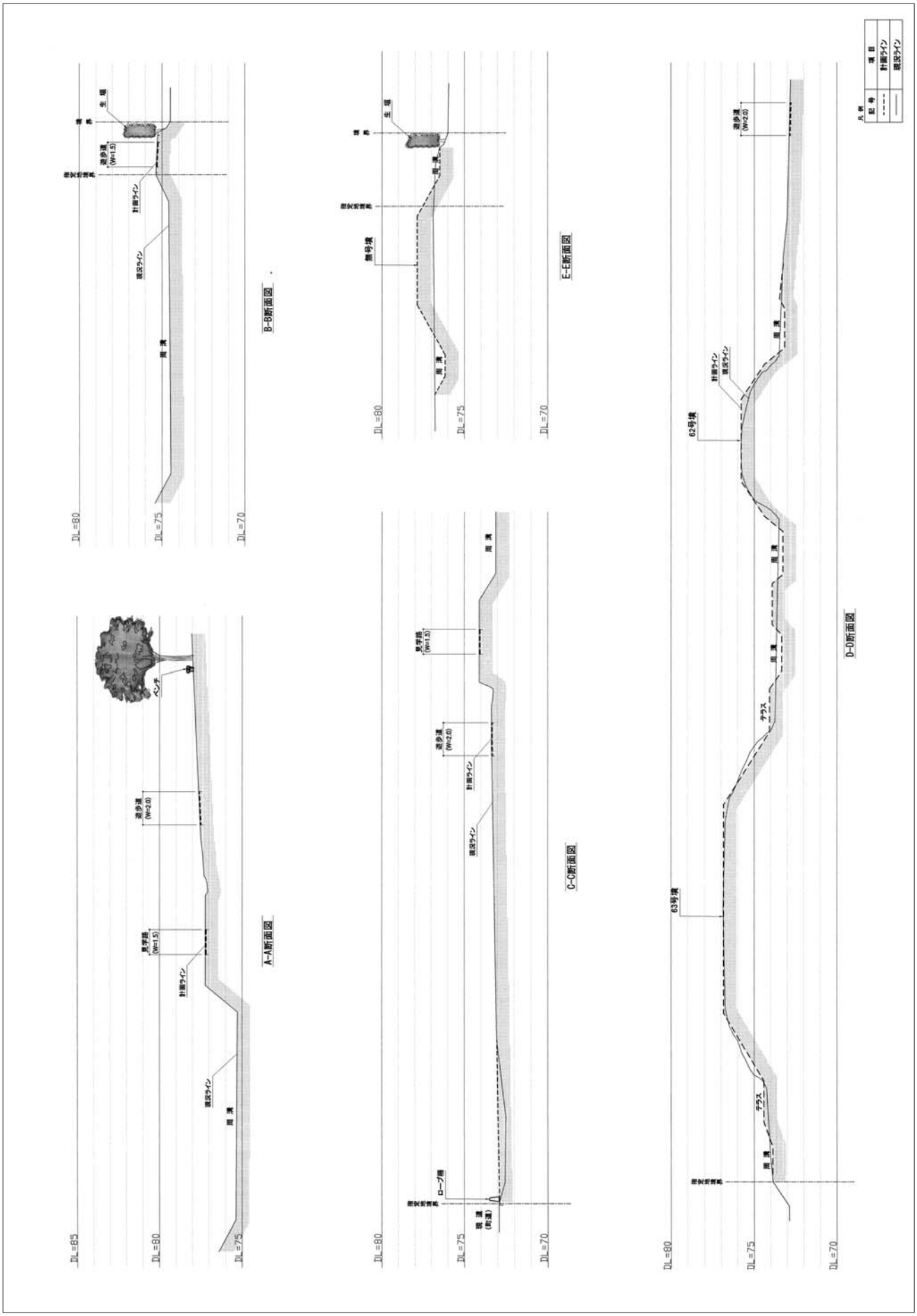


図６　百足塚古墳周辺整備設計図（２）

土を覆って整備面をつくる方法で行うこととし、段築は不明瞭であるため、ゆるい傾斜変換をもたせた１段築成で仕上げることとした。

63号墳は確認調査の成果から平面形を楕円形とすることとした。南から東側にわたって掘削された第１段を復元することとし、周溝は撹乱土を除去して半分程度の深さを表現することとした。

各古墳は次年度以降継続する調査で、土橋などの存在を把握し、形状を極力正確に表現するようにしたい。

⑶　園路の整備

古墳周辺の管理や見学者の利便性を考慮し、町道から侵入し周囲をまわるような幅１．５m程度の園路を設置し、三和土などで固める仕上げとする。また外堤上を回遊するような見学路も同様に設置し、同様の三和土仕上げとする。

⑷　植栽計画

南から南東部にかけては近接する建造物を遮蔽するため、イヌマキまたはカヤなどの生垣を設置する。ある程度高さが必要な個所にはヤブツバキやヤマザクラを配置し、空間づくりをすすめる。

⑸　周辺地形の復元

全体に掘削の及んでいる百足塚西側の広場を盛土復元して違和感のない景観整備をすすめる。北東側の湧水地にはゴロ太石を搬入し、自然地形を利用した空間整備を行う。

⑹　各種サイン類の整備

百足塚古墳周辺全体と個々の古墳の説明および誘導のためのサイン類は自然石や木をつかった自然な資材を利用して配置する。極力汎用性があり、取替可能な資材を利用する。

⑺　便益施設

指定地内における便益施設として園内２か所の計４基のベンチを設置する。

⑻　今度の計画

実施設計で計画する施工内容を再度検討し、直営で行う部分と委託や工事請負で行う部分を整理し、２カ年間で整備実施する予定である。

Ⅳ．まとめ

本年度は百足塚古墳周辺整備のための確認調査と、それらデータをもとにした実施設計の策定を行った。

確認調査では新しい発見となった209号墳から、多量の須恵器が検出されて予想を超える須恵器の祭祀があったことがわかった。

実施設計は、これら３基の円墳の復元のほか、地形復元、園路などの便益施設整備を含み、２カ年の整備後、見学ができるような環境を整える予定である。

事業進行と同時に報告書作成にむけて作業を進めていく。

【参考文献】

⑴　宮崎県　『宮崎県史叢書　宮崎県前方後円墳集成』1997
⑵　柳沢一男「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第14号 1995
⑶　岸本直文「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』第39巻２号 1992
⑷　高橋克壽「西都原１７１号墳の埴輪」『宮崎県史』第７号 1994
⑸　樋渡将太郎「町内遺跡19」『新富町文化財調査報告書』第35集 新富町教育委員会 2003
⑹　有馬義人「新田原古墳群」『宮崎県史叢書 宮崎県前方後円墳集成』宮崎県 1997

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	ぎおんばるこふんぐん 13
書　　名	祇園原古墳群13
副　書　名	国指定史跡「新田原古墳群」史跡整備にともなう発掘調査概要報告書
巻　　次	13
シ リ ー ズ 名	新富町文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第 57 集
編　集　者　名	有馬　義人・樋渡将太郎
編　集　機　関	新富町教育委員会
所　在　地	宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地
発 行 年 月 日	２０１０年　3月３１日

ふりがな 所収遺跡名・地区名	所　在　地	コ　ー　ド		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
新田原58号墳周辺（にゅうたばる　ごうふんしゅうへん） (百足塚古墳)	大字新田字東俣（おおあざにゅうたあざひがしまた）	47	1001	090917 ～ 100331	約 3,000㎡	史跡整備

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新田原58号墳（にゅうたばる） (百足塚古墳)	古　墳	古墳	円墳の周溝	須恵器・土師器	古墳時代後期

新富町文化財調査報告書　第57集

祇 園 原 古 墳 群 13

発行年月日　２０１０年３月
発　　行　宮崎県新富町教育委員会
印　　刷　㈱印刷センタークロダ